

帝国主義の侵略反革命を粉砕し全世界の帝国主義を打倒せよ／スターリン主義との國際党派闘争を組織し世界プロレタリア革命—世界プロレタリア共産主義を組織する世界唯一の國際階級斗争の最前線／

<p>春期闘争の基調 三里塚現地闘争に決起せよ! ◆映画批評(遠い夜明け) ..... P11</p>	<p>1988年 3月1日 第392号 編集発行人 高木一夫 一部 200円</p>	<p>火炎ノ火 NOROSHI</p>	<p>共産主義者同盟（全国委員会） ■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄西2-8-19 明豊ビル401号 大労協内 TEL (06)371-3706 ○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫 ○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫</p>
---	--	-------------------------	---

3-27

## 三里塚現地総決起闘争

●三月二七日(日)午後一時から ●現闘本部前集会場

主催 三里塚芝山連合空港反対同盟(代表 热田一)



前進する第三世界の革命

銃を手にして行軍するフィリピン新人民軍の若き兵士たち

# 大衆的な国際連帯闘争組織せよ

## 一章

### 日帝の新たな延命戦略

竹下新政権のもとで、日帝は国際帝国主義としての飛躍をおし進めている。われわれは日帝の新たな延命戦略を次のようにとうえてきた。

「その第一は、帝国主義間抗争に耐えるための国際競争力の増強と、それを可能とする国内体制の確立。その第二は、①ソ連・中国の封じこめ、②帝国主義の共同市場の安定化、③反帝民族解放―社会主義革命制圧という国際帝国主義の共通戦略の実行。以上の経済的には相矛盾する戦略の実行にある。現代過渡期世界における帝国主義は、第二次世界大戦前のように、帝国主義間抗争の推進を、そのまま國家戦略にすることはできなくなっている。ソ連・中国をはじめとする社会主義国家の存在と、新植民地主義支配下諸国における反帝民族解放―社会主義革命の前進は、帝国主義にとって、帝国主義間抗争の激化→ブロック化・世界市場の崩壊→帝国

全国のたたかう労働者・学生諸君に今春季闘争の基調を提起する。まず第一章で、竹下政権下での日本帝国主義の延命戦略について分析し、二章では、先進的労働者・学生が担うべき新たな前衛任務について触れ、最後に三章で、今春季の基軸的任務を提起する。すべての諸君がこの闘争基調のもと、ともにたたかいに立ちあがることを訴える。

## 八八年春期闘争の基調

1988年3月1日

烽 火



日米同盟関係の強化を約束する竹下(1月13日)

主義間戦争へとつき進むことを不可能にしてい  
る」(烽火八八年新年号)。

竹下政権は、昨年一月の ASEAN 首脳会  
議への出席、本年一月一四日の竹下訪米・日本  
首脳会談、そして一月二十五日の衆議院施政方針  
演説を通して、このような日帝延命戦略の強力  
な推進者としての姿を明確にしている。次にこ  
れを具体的にみていく。

### 新植民地主義支配の拡大

激化する帝国主義間抗争に勝利するために日  
帝は、この数年、他国への直接投資を急速に拡  
大してきた。とりわけアジア諸国、中南米諸国  
への投資は、これらの諸国の労働者を日本とは  
比べものにならない低賃金と劣悪な労働条件で  
搾取・収奪し、日帝の新植民地主義支配の網の  
目を急速に拡大するものとなっているのである。  
日帝はこうして日帝企業の「多国籍企業化」を  
おし進め、米帝・西欧帝との抗争にうち勝とう  
としている。

竹下政権は、このような直接投資と新植民地  
主義支配の拡大を、国家自身の政策として強力  
に推進しているところにその特徴がある。竹下  
は昨年一二月二十五日の日本・ASEAN 首脳会  
議で、「今後三年間に通常の二国間資金協力に  
追加して二〇億ドルを下回らない額の ASEAN  
日本開発ファンドの供与」をおこなうことを  
約束した。また八八年度予算案では、「アジア  
工業化総合調査事業」に昨年の二倍にあたる三  
億九九〇〇万円、「民間専門家派遣事業補助」  
に一七億六三〇〇万円(四六%増)、日本の労  
働政策をアジア諸国に広げるための「アジア地  
域雇用開発調査研究費」(新設)に八四〇〇万  
円が計上されている。さらに政府と経団連は、  
「途上国への直接投資を推進するのが主な目

# ゆる抵抗の細流を 正面戦に統合せよ

## ■春季闘争の基調

的」(経団連)である「発展途上国経済活性化  
機構」を本年六月までに発足させようとしてい  
る。それは、「こちらからプロジェクトの計画  
案を示して、途上国に実行してもらう」(同)  
というように、日帝資本の進出にとつても  
つとも有利となるように植民地国の経済政策に  
直接介入することを同時に狙つたものである。

### 帝国主義共通戦略の推進

日帝・竹下政権は、このような新植民地主義  
支配の拡大を背景にして、帝国主義共通戦略の  
推進者としてさらに大きく飛躍しようとしてい  
る。「それでは日本は具体的に何をやろうとし  
ているのか。一言でいえば「世界に貢献する日  
本」をつくりあげることであります」(一月  
五日、米ナショナルプレスクラブにおける竹下  
演説)。それは、「私は他國から指摘されたか  
ら」ということではなく、みずからの意志と主体  
性にもとづいて必要な政策を推進してまいります」(同)というように、日帝自身の独自の利  
害による決断なのである。いまや世界第一位の  
経済力を持ち、全世界に新植民地主義支配を広  
げる日帝にとって、帝国主義共通戦略の推進は  
みずから延命のために絶対不可欠なのである。

その第一の焦点は、日帝の軍事力を米帝の世

界的軍事戦略・米軍配置と結合させ、日米安保  
を国際帝国主義の延命のための相互補完的軍事

同盟へと再編していくことにある。

そのなかで見過してならないものは、米帝  
によるフィリピンへの直接軍事介入策動が強ま  
っていることである。米帝はLIW(低強度度  
戦争)戦略にもとづき、すでにNPA(新人民  
軍)との実際上の戦闘状態に入っている。しか  
し、それによってもおしこめられない革命の  
前進に対して、米軍の直接投入が不可避となっ  
てきている。前述の日米軍事首脳会談は、フィ  
リピン情勢を重要な議題として検討した。また

竹下とレーガンは共同新聞発表において、特に  
フィリピン・アキノ政権の支援を掲げた。これ  
らはそのあらわれである。こうして日帝は、直  
接的な反革命的役割をますます積極的に担おう  
としているのである。

その第二の焦点は、ODA(政府開発援助)

など第三世界諸国への「経済援助」を急速に拡  
大し、新植民地主義支配下諸国における階級闘  
争の激化をおしとどめ、現地反共政権を強力に  
支えることにある。

八八年度予算案において、ODA予算は前年  
度比六・五%増の約七〇一〇億円(約四五億ド  
ル)にのぼった。さらに中南米むけの資金還流  
計画約四〇億ドルがすでに実行に移されており、  
前述の「ASEAN 日本開発ファンド」が今年

七八年の日米防衛協力ガイドライン締結以降、  
日米帝国主義は日本有事研究、極東有事研究、  
シーレーン防衛研究などの作戦研究と軍事演習  
を積み重ね、日米共同作戦体制を築きあげてき  
た。去る一月二〇日に米国防省でおこなわれた  
日米軍事首脳会談(瓦防衛局長官・カールリッ  
チ国防長官会談)は、その強化をさらにはかる  
うとするものであった。会談では、次期支援戦  
闘機(FSX)の共同開発などとともに、「有  
事の際の米軍部隊来援を円滑にするための日米  
共同研究」に着手することが同意された。この  
新研究のもつとも危険な点は、まず米軍軍備の  
「事前集積」を含むことにある。事前集積とは、  
米軍が戦争開始に備えて、戦車などの重装備・  
弾薬・燃料などを戦場と想定される場所近くに  
配置しておき、部隊の急速な展開と戦闘能力の  
維持・向上を狙うものである。すでにNATO  
では、陸軍六個師団分、空軍六十個飛行隊分、  
海兵隊一個旅団分が配備されている。このよう  
な事前集積が日本におこなわれるならば、在日  
米軍基地ははるかに強力な出撃拠点へと変貌す  
る。さらに新研究は、米軍が日本や極東に急き  
よ展開する時に、民間航空機や船舶を含む軍事  
輸送手段をどのように確保するのかという問題  
を扱うがゆえに、有事立法の制定へとつながっ  
ていく危険性をもつてゐる。また他方では、日  
帝企業のSDI計画への参加、日米科学技術協  
定改定などが進められている。

度から供与され始める。これらの「援助」は、フィリピンやニカラグア周辺諸国、国際帝国主義の戦略的要衝に集中しており、反帝民族解放・社会主義革命の前進を阻止し、現地反共政権を支える目的でおこなわれていることはあまりにも明らかである。

さらに第三の焦点は、「わが国経済を世界経済といつそく調和のとれたものにする」(竹下施政方針演説)ことを掲げて、国内経済構造の転換を急速におし進めることにある。

それは、巨大な財政赤字と貿易赤字に苦しむ米帝を救済するものであるとともに、円高・ドル安の重圧に耐えぬく日帝自身の国際競争力を再増強しようとするものである。構造不況産業や国際競争力を失った産業の縮小・スクラップ化、首切り合理化の徹底化。これらを通して三百万人失業時代が労働者に襲いかかっている。

とりわけ激しい合理化がおこなわれた造船業員・協力工が、昨年一〇月には三万八〇〇〇人今まで急減したという。また農産物輸入自由化と農業政策の転換によって、ひとにぎりの富農と農業では食べていけますますプロレタリア化する部分への農民層の分解が進行している。

### 戦後階級支配からの転換

以上の延命戦略を実行するために、反人民的国内政策が急速に進められている。日帝は戦後長期にわたって国際階級闘争の激動への対応を米帝にゆだねて、帝国主義としての復興と成長をとげてきた。それゆえ、いま国際帝国主義として飛躍するためには、あらゆる面で戦後支配からの転換を必要としているのである。

日帝にとってその最大の課題は、いすれ不可避となる侵略反革命戦争出動を可能とすることにある。米帝はいうまでもなく、インドシナやアルゼンチンなどへの軍事出動をくり返したフランス帝国主義、近くはフォークランド戦争を組織したイギリス帝国主義など、他の帝国主義はいずれも戦後何度も侵略反革命戦争へ国家と国民を総動員した経験をもっている。だが日帝はそうではない。日帝にとって侵略反革命戦争への出動は、戦後の階級支配、法制度、国民的イデオロギー状況、国家財政などからの根本的な転換を必要とするのである。

そのために日帝・竹下政権は、第一に、あらゆる階級闘争体の解体をおし進めている。帝国主義的労戦統一は、ブルジョアジー自身が組織する産業報国会運動にはかならない。来年に発足する右派ナショナルセンターは、いすれ労働者のあらゆる決起を抑止するのみならず、労働者を侵略反革命戦争へと総動員する役割を果たしていきである。労基法の改悪につづく労組法の改

# 労働者人民のあら 日本帝国主義への

悪策動は、労戦統一と連動した労働運動に対するきわめて重要な破壊攻撃である。

さらに日帝は、八八年度予算において「極左テロ対策」に五六億円を計上し、共産主義運動の壊滅にむけた攻撃をいつそう強化しようとしている。日帝は労働者人民のあらゆる憤激を、自民党と、右派ナショナルセンターを基盤にして成立する第二保守党とのあいだの議会内の対立に收れんさせ、他方にいて革命的な共産主義運動が労働者人民と結合していくことを何としても阻止しようとしているのである。三里塚二期本格着工、拘禁二法の国会上程など攻撃は矢張りやである。

第一の基軸的攻撃は、軍事財源の恒常的確保のための人民収奪である。

竹下政権は、いよいよ税制改革・大型間接税の導入につき進んでいる。「財政・税制構造の抜本的改革を、いまのうちにやっておかねばならない」「政府税制調査会の答申をちようだいしたら、その実現に不退転の決意で臨むことが私の大きな使命だ」(竹下二月四日衆院予算委員会)。小倉政府税制調査会会长が、「理屈のうえではE.C型の付加価値税が最適である」というように、竹下政権は売上税型の大増税法案を今通常国会に提出しようとしている。いかに福祉のためなどと理屈をつけようとも、新大型間接税の導入が軍事財源に当てられていくのはまちがいがない。

第三の基軸的な攻撃は帝国主義的排外主義国民イデオロギーの強制的形成である。日帝は民族意識・国家意識を鼓舞し、排外主義へと労働者人民を組織せんとする攻撃をあらゆる面から強化している。一昨年の天皇在位六

〇年式典、昨年の皇太子訪沖を強行した日帝は、いま天皇の死・Xデーを利用して、天皇制・天皇制イデオロギーのもとへ労働者人民を組織するための大攻撃を準備している。現天皇の死から皇太子の即位に至る二年のあいだに、嵐のような天皇攻撃によって、労働者人民の意識をいったん見送られている靖国神社公式参拝の再開、教育改革による愛国心教育の強化などが進められようとしている。

第四の基軸は、侵略反革命戦争出動にむけた法制度的・軍事的準備である。

七〇年代後半以降、日帝は一貫して有事立法の制定を追求しつづけてきた。日米共同作戦研究が進むとともに、この必要性はいつそう増大している。戦争への国家と国民の総動員のため、階級闘争の暴力的弾圧のために、日帝には有事立法制定がぜひとも必要になつていて。この数年間、日帝が執拗に制定をもくろんできた国家秘密法は、有事立法の先取りともいえるものである。国家秘密法の危険性は、「スペイカルの防衛」を理由に労働者人民の政治的自由を大幅に剥奪するとともに、他国の階級闘争・共産主義運動との国際的結合を直接的にたたきつぶそうとすることにある。同時に国家秘密法は推進派が公言するように、国家に対する忠誠を強制力をもつて人民に要求するものであつて、重大な排外主義攻撃である。自民党の「防衛秘密外國通報行為等防止法制定に関する特別委員会」は、八五年一二月に草案となつた国家秘密法を、「防衛秘密法」と名をかえて今通常国会に提案することを要求している。そして、「スピバイ防止法の制定を(中曾根政権下で)実現できなかつたのは結局のところわれわれの声が足らなかつたからにほかならない」として、竹下政権下での「国民運動」の強化を強調している。そして最後に、新しい軍事戦略展望のもとに自衛隊の強化をおし進められていることに注目しなければならない。

防衛厅はすでに、現在の「中期防衛力整備計画」(八六・九〇年度)の後継となる次期防衛力整備計画の内容を煮つめている。その中核となる構想は、日本本土を中心、超水平線(O.T.H.)レーダー、空中警戒管制機・レーダーサイトなどによる多層の警戒網を張りめぐらせ、空中給油機に支えられた要撃戦闘機F-15、イージス艦、新型ミサイルによつてたたかうといふ「海上防空」と「前方対処・早期撃破」戦略にある。さらに東山海幕長は「空母の導入も当然選択肢の一つ」(「軍事研究一月号」とすらのべている)。この新たな戦略によつて自衛隊は、アジア全域を戦場とした軍事展開能力を大規模に増強し、まさに侵略反革命戦争をたたかう軍隊へと大きく脱皮しようとしているのである。

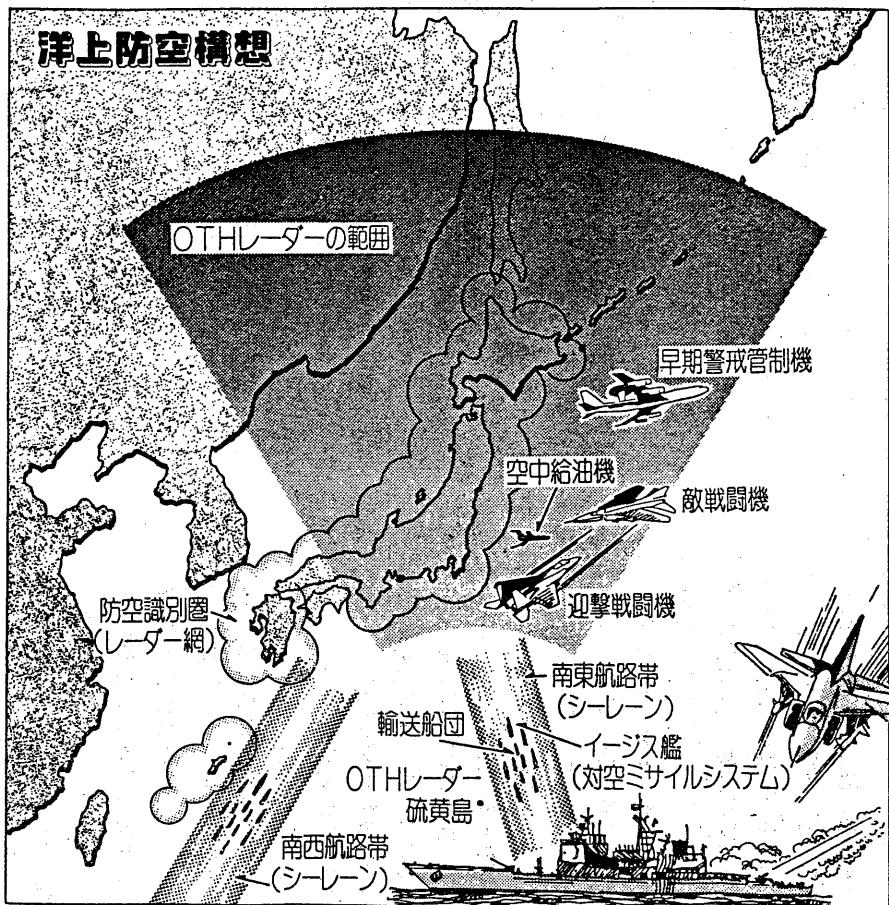
## 二章

### われわれの新たな前衛的任務

全世界はいまや激しい流動のなかにある。日本帝もまた国際帝国主義としての抜本的な飛躍にむかっている。この新しい時代を迎えて、戦後わが国階級闘争を支配した社共・総評は、その内部から帝國主義的排外主義への大屈伏を生みだした。新たな時代の到来は、階級闘争の前衛たらんとするどのような部分に対しても、かつての時代のたたかいにとどまることを許さない。わが国階級闘争の発展にむけた新たな任務が、すべての先進的労働者・学生に対して真正面から提起されねばならない。

日本帝が新植民地主義支配を全世界へ拡大し、反帝民族解放・社会主義革命の正面敵として登場するなかで、わが国プロレタリアートの自己帝国主義＝日本帝打倒の任務はいよいよ重要ななつてきている。わが国においてプロレタリア独裁権力を樹立し、全世界の帝国主義を打倒し、共産主義革命の勝利を実現するために立ちあがることを、全世界の階級闘争がわれわれに要請している。だがわが国の階級闘争は、いまだ革命的危機の時代からは遠く離れていている。日本帝ブルジョアジーの圧倒的な攻勢は断固として反撃し、革命の準備を着実に前進させていくことをわれわれに問われているのである。

一九八八年、それは戦後階級闘争が立脚した



「沖縄タイムス」より

ショナルセンターを誕生させる。並行して地評・地区労のほとんどが解散するか、あるいは実質を失い、総評を中心とした戦後階級闘争の基礎構造は完全に崩壊する。新ナショナルセンターは産業報国会としての性格を次第に鮮明にして、民主主義闘争や平和運動や制度要求など、ブルジョアジーが望むあらゆる領域で報国運動を組織していくであろう。だが上層労働者に基盤を置くこのナショナルセンターは、拡大する下層労働者の憤激を決して集約できない。また戦後階級闘争の基礎構造の崩壊は、労働者大衆と共産主義運動の結合を頑強に阻んできた社共・総評の労働者支配の崩壊でもある。これらの面では、階級闘争を大きく前進させるための好機が到来したともいえる。しかしこの新たな条件を利用して共産主義運動と労働者大衆の直接的結合を発展させていこうとする努力は、残念ながらいままだほとんど前進していない。そのもつとも深い主体的根拠は、社共・総評を後衛と見て、労働者大衆の組織化を彼らにゆだねたまま前衛たらんしてきたわが国新左翼運動の限界にこそあるといえる。かってのわれわれをも含めて引きずってきたこの限界を突破し、労働者大衆の組織化に直接に責任を負う社共にかかる共産主義前衛党の建設こそが、いま厳しく問われているのである。

戦後階級闘争の基礎構造が崩壊するなかで、日共・統一労組懇と社会党協会派は、総評の防衛を掲げて左派ナショナルセンターの形成を追求してきた。だが彼らを中心とするナショナルセンターの形成は、非常に困難であることがいよいよ明白になってきている。「総評労働運動の防衛」という彼らの路線は、その歴史的な成立の条件をもや持たない。そればかりかそれは、総評労働運動の根本的誤りである経済主義・組合主義をも含めて継承しようとするがゆえに、厳しく批判されねばならないものなのである。

われわれもまた、可能であるならば左派ナショナルセンターの成立を望むものであり、そのための努力を厭つものではない。だが同時にわれわれは明日の階級闘争のために、全国各地方に労組連合と大衆的プロレタリア政治統一戦線を、分かちがたく結びついしたものとしてぜひとも建設しなければならないと確信する。これがみが、総評完全崩壊後の新たな階級闘争の基礎構造たりえるからである。

だが総評が完全に崩壊するまでに労組連合を形成しうる地方は、きわめて限られるであろう。また大衆的プロレタリア政治統一戦線の建設も、京都を除いてはいくつかの地方で始まつたばかりである。この過渡期において、労働者人民のさまざまな抗辯争が、多くの場合依拠すべき階級闘争とその基礎構造をもたないままに市民運動という形でたたかいつづけられている。そしてその相互のつながりを求めて、市民主義的

上層労働者に基盤を置く帝國主義労働運動のナ

統一戦線を形成しようとする動きが各地に存在している。また多くの市民運動のなかに反近代主義、空想的社會主義の影響が広まっている。その根柢をわれわれは、総評労働運動にかわる階級的労働運動をいまだ全国各地方に創出できていない労働運動の現状、中ソ一国社会主義路線の破産とブルジョアジーの反共宣伝に有効な反撃をいまだ組織できない共産主義運動の現状にあると考える。それゆえわれわれは、あらゆる労働者人民の抵抗闘争を日帝との闘争へと結合していく大衆的プロレタリア政治統一戦線を労働運動を中軸に何としても建設していくために、そして共産主義を人民の希望として復権するために、すべての先進的労働者人民が結集するよう呼びかけるものである。同時に、この現状を変革されるべき過渡期の現状とともに、積極的なものとして固定し、市民主義的統一戦線のうえに立つ新たな議会主義政治勢力の形成を展望したり、あるいは共産主義を空想的社會主義と和解させ、そのなかに解体しようとする動きに対しても、厳しい批判を組織しなければならない。

われわれは以上を踏まえ、すべての先進的労働者・学生諸君に対してわが国階級闘争を発展させるための新たな前衛任務を次の三点で提起する。

### ①プロレタリア政治闘争を日帝との正面戦へ発展させよう。

②国際主義プロレタリアートを建設しよう。

③共産主義を人民の希望として復権しよう。

## すべての抵抗闘争を 日帝への正面戦へ

突然の解雇に生きるすべを奪われた労働者たち。労働者としての誇りのいっさいを奪われて、長年働きつけた職場を追われ出向を余儀なくされた労働者たち。激しい合理化と労働者間の競争を強いられることによって、心と体を日々削りながら働くかざるをえない労働者たち。低賃金で不安定な臨時工・パートにしかつけない労働者たち。日帝ブルジョアジーによる首切り合理化や搾取と収奪の強化に対し、労働者大衆のなかからおさえようのない資本家ともへの憤りと反抗が日々生みだされつづけている。激化する帝国主義間抗争の犠牲を、一身に集中させているのは彼らだからである。

沖縄や三宅島など全国各地でたたかいつづけられている反基地闘争。軍事空港建設の前に二〇余年にわたって立ちはだかってきた三里塚農民のたたかい。チエルノブリ以降ますます広がりつづけている反原発闘争。全国で高揚した国家秘密法反対運動。かつて中国・東南アジアへの侵略戦争に従軍した人たちが、深い人間的

悔恨をこめてその体験を告白し始め、風化していく戦争体験を語りつごうとする努力が各地でつけられている。日帝の侵略反革命戦争出動にむけた攻撃は、戦後政治からの根本的な転換をなすとするものであるだけに、たとえその多くがいまだ小さなものであつたとしても数えきれないほどの抵抗のたたかいを全国に生みだしている。

もはや社会党・総評に、いかなる意味でもこれららの抵抗闘争の組織化を期待することはできない。先進的労働者・学生は、人民のあらゆる憤慨と抵抗闘争を敵から防衛し促進することを、みずから任務として引き受けなければならない。

もちろん、われわれはそこにとどまることはできない。いかに戦闘的であろうとも、人民の抵抗が敵の政策の一部分とだけたかうものであり、人民の一部の利益のみを代表している限り、それは各個に分断され個別に解体されいかざるをえない。われわれは、眼前の敵と個別の攻撃の背後に存在する共通の敵・日帝とその全体的攻撃をこそ、抵抗闘争に立ちあがる労働者人民に指示示さなければならぬ。そうして個別の要求を統合し、分散した戦場を結合し、あらゆる人民の抵抗の細流を日帝に対する正面戦へと発展させていくこと、ここにわが国の先進的労働者・学生が担ねねばならない鮮明な政治闘争上の任務が存在しているのである。それは必ずプロレタリア階級の大軍を動員し自覚めとして大衆的プロレタリア政治統一戦線をあらゆる困難を越えて創出しなければならない。

われわれはそのためこそ、わが国の労働運動活動家のなかに広く存在している誤れる経済主義・組合主義の見地、すなわち労働運動を労働組合運動だととらえ、労働組合指導の主任務を経済闘争の指導にあるととらえることによって、政治闘争を労働運動とは何か別のところに存在するものととらえる見地が、克服・一掃されねばならないと確信する。

わが国階級闘争のなかに、この経済闘争・組合主義を強力にもちこんだものこそ社会党・総評であり、それを追認した日共であった。彼らは経済闘争と政治闘争を鋭く分離し、労働者の憤激を戦闘的経済闘争と政府に対する経済闘争にすぎない組合主義的政治闘争にしばりつけた。まさにその帰結こそ、帝国主義的排外主義への屈伏と帝国主義的労働統一への全面的合流である。そしてこのような現実が眼前に存在していながらかわらず、全民労連に反対する労働運動活動家のなかにも、いまなおこの誤った見地が広く存在している。

われわれはいま、帝国主義的排外主義が人民の内部から自然発生する時代を迎えている。帝国主義的排外主義は、帝国主義間抗争が激化する時代において、帝国主義超過利潤を経済的基礎とするこれまでの生活を防衛せんとして、企業の防衛と日帝権益の防衛をみずから利益だと錯覚し、ついには日帝の侵略反革命戦争出動するこれまでの生活を防衛せんとして、企業の防衛と日帝権益の防衛をみずから利益だと錯覚し、ついには日帝の侵略反革命戦争出動すればならない。あらゆる人民の抵抗闘争と日帝との正面戦を結合させ、プロレタリア階級の大軍をその中心的担い手として登場させていくこと、そのためのもつとも広大な政治闘争の戦場として大衆的プロレタリア政治統一戦線をあらゆる困難を越えて創出しなければならない。

われわれはそのためにこそ、わが国の労働運動活動家のなかに広く存在している誤れる経済主義・組合主義の見地、すなわち労働運動を労働組合運動だととらえ、労働組合指導の主任務を経済闘争の指導にあるととらえることによって、政治闘争を労働運動とは何か別のところに存在するものととらえる見地が、克服・一掃されねばならないと確信する。

わが国階級闘争のなかに、この経済闘争・組合主義を強力にもちこんだものこそ社会党・総評であり、それを追認した日共であった。彼らは経済闘争と政治闘争を鋭く分離し、労働者の憤激を戦闘的経済闘争と政府に対する経済闘争にすぎない組合主義的政治闘争にしばりつけた。まさにその帰結こそ、帝国主義的排外主義への屈伏と帝国主義的労働統一への全面的合流である。そしてこのように現実が眼前に存在していながらかわらず、全民労連に反対する労働運動活動家のなかにも、いまなおこの誤った見地が広く存在している。

この時代において、労働者人民のあらゆる抵抗闘争を日帝との正面戦へと発展させるためにねじ曲げていこうとするのである。それゆえこの排外主義は労働者の上層のみをとらえるのではなく、放置しておけば下層労働者のなかにまで深く浸透していく。

労働者人民の憤激を自身にはむかわないので、帝國主義抗争の激化によって余裕を失えば失うほど、このような帝国主義的排外主義を煽りたて、労働者人民の憤激を自身にはむかわないようにねじ曲げていこうとするのである。それゆえこの排外主義は労働者の上層のみをとらえるのではなく、放置しておけば下層労働者のなかにまで深く浸透していく。

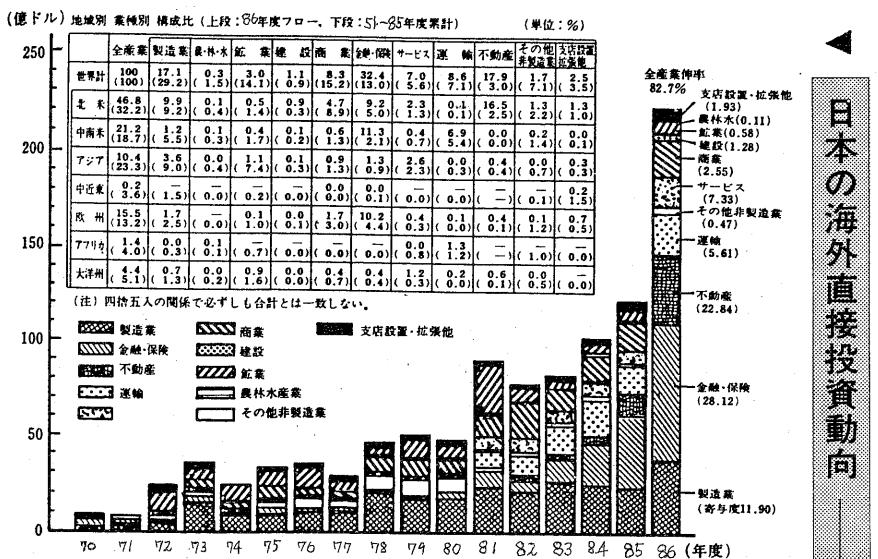
この時代において、労働者人民のあらゆる抵抗闘争を日帝との正面戦へと発展させるためにねじ曲げていこうとするのである。それゆえこの排外主義は労働者の上層のみをとらえるのではなく、放置しておけば下層労働者のなかにまで深く浸透していく。

労働者人民の憤激を自身にはむかわないので、帝國主義抗争の激化によって余裕を失えば失うほど、このような帝国主義的排外主義を煽りたて、労働者人民の憤激を自身にはむかわないようにねじ曲げていこうとするのである。それゆえこの排外主義は労働者の上層のみをとらえるのではなく、放置しておけば下層労働者のなかにまで深く浸透していく。

この時代において、労働者人民のあらゆる抵抗闘争を日帝との正面戦へと発展させるためにねじ曲げていこうとするのである。それゆえこの排外主義は労働者の上層のみをとらえるのではなく、放置しておけば下層労働者のなかにまで深く浸透していく。

労働組合運動は、労働運動のもつとも基礎的な部分ではあっても、労働運動イコール労働組合運動では断じてない。労働運動指導の主任務は、経済闘争指導にあるのでは断じてない。労働運動指導を結合させることにあるのであり、労働者を第一次団結体・労働組合に組織するのみならず、より高次の団結体へと結集させていくことにあるのである。そして戦後今日ほど、経済闘争と政治闘争を結合させ、政治闘争の組織化を労働運動指導の主実践として組織すべき時はないのである。

## 直接的で実際的な 国際連帯運動つくれ



日本国内の工場を閉鎖して生産設備を海外に移転する動きも引きつづき拡大している(アイワ・シンガポール工場)

日帝支配下の労働者との直接的で実際的な国際連帯闘争を真正面から提起しなければならない。労働運動や学生運動、民主主義闘争の内部で先進的活動家は、「國際主義プロレタリアート」の建設をいまこそ掲げねばならない。労働者階級の大軍に立脚した国際連帯闘争と国際主義プロレタリアートの建設戦を大きく前進させることができるか否かが、わが国階級闘争の生き死にを左右する時代がいま始まっているのである。この新たな時代の要請に応えるために、先進的労働者・学生はどういう新たな実践に踏みだしていかねばならないのか。

その第一は、労働者人民の日帝への批判を、国際的視野と国際的な階級闘争の利益に立つて日帝批判へと変革していくことである。

日帝が次々と海外への資本投下を進めることによって、いまやわが国の労働者のみならず、膨大な他の労働者が日帝資本によって直接的に搾取・収奪され始めている。そして、日帝はわが国のみならず他国の階級闘争の直接的な抑圧者として登場し始めている。あくなき利潤を追い求める資本の動きにおいて、階級闘争の抑圧において、日帝ブルジョアジーの前にもはや国境は存在していない。

しかしこの急速な条件の変化に対し、われわれの日帝への批判と闘争が、その内容において大きく立ち遅れてきたことが自覚されねばならない。ブルジョアジーにとってよりもプロレタリアートにとってこそ、国内と国外を遮断する巨大な壁として国境が存在しているのが現実である。日帝の国内動向を問題にしたものほとんどであるという、わが国労働者人民の日帝批判の内実が根本的に変革されねばならない。

高度に発達した帝国主義のもとでは、ブルジョアジーの搾取と支配は膨大な超過利潤を集積する帝国主義本国内よりも、他国において、とりわけ新植民地主義支配下諸国においてはるかに激しく過酷なものとしてあらわれる。それゆえ日帝に対するもともと激しく鋭い告発と批判は、日帝本国内においてではなく、日帝支配下の他の国々のプロレタリアートのなかからこそ発生する。だからこの新しい時代において、日帝の国内における動向を批判するだけでは、いささかも日帝を批判しきったことにはならない。他国における日帝の搾取と支配に対する批判を、日帝批判のもっとも重要な部分として指定し、労働者大衆に真正面から提起しなければならない。そして、他の国々のプロレタリアートによる日帝への告発と批判を、わが国労働者の日帝批判の内実とするための暴露と煽動が、今後決定的に重視されねばならない。このような日帝批判の提起なくして、わが国の労働者のなかに、日帝との闘争の確信を広範でかつ強固なものとして形成することはできないからである。

同時に今後の日帝との闘争は、日本本国内における闘争としてのみ展望してはならない。日本本国内においては、日帝との闘争に立ちあがらんとする労働者は、あまりに少数であり孤立しているかのように見える。しかし目を他国に転じれば、いく百万いく千万もの労働者人民が日帝を打倒すべき正面敵として掲げ、不可避に日帝との闘争に立ちあがっていくであろう。プロレタリアートの日帝に対する闘争は、この国内と国外における闘争を強く結合させて組織されねばならない。

第二に、わが国の労働者を国際的なプロレタリア階級へと形成していくための、直接的で実際的な国際主義連帯運動を創出することである。

リニア階級へと形成していくための、直接的で実際的な国際主義連帯運動を創出することである。

この提唱は、わが国の労働者が抑圧民族の一員であることをあいまいにするものでは決してない。わが国の労働者が、自国帝国主義打倒といふうみずからがまず担わねばならない任務を果たすためには、そして帝国主義的排外主義と最後までたたかいつゝためには、何よりもプロレタリアートの本性的な国际性に断固として立脚すべきことを提起しているのである。昨年以来のわれわれの新たな国際主義実践は、たゞえ国は違っていても、労働者は的確な指導さえあれば他国の労働者の苦惱と闘争に共感し、みずからたたかいの未来をそのなかに見ることさえできることを教えた。このなかに内包されているプロレタリアートの国际性こそ、帝国主義的排外主義とたたかうための何にもかえがたい武器である。

国際主義プロレタリアートの建設とは、大衆的な国際連帯闘争の組織化や大衆組織間の国境を超えた結合にとどまるものではない。それは他の国々のプロレタリアートとともに新たな世界党を創建し、世界赤軍を組織していくという現代過渡期世界をプロレタリア世界革命へと転化していくための最先端の任務へと、わが国プロレ

アジーの搾取と支配は膨大な超過利潤を集積する帝国主義本国内よりも、他国において、とりわけ新植民地主義支配下諸国においてはるかに激しく過酷なものとしてあらわれる。それゆえ日帝に対するもともと激しく鋭い告発と批判は、日帝本国内においてではなく、日帝支配下の他の国々のプロレタリアートのなかからこそ発生する。だからこの新しい時代において、日帝の国内における動向を批判するだけでは、いささかも日帝を批判しきったことにはならない。他国における日帝の搾取と支配に対する批判を、日帝批判のもっとも重要な部分として指定し、労働者大衆に真正面から提起しなければならない。そして、他の国々のプロレタリアートによる日帝への告発と批判を、わが国労働者の日帝批判の内実とするための暴露と煽動が、今後決定的に重視されねばならない。このような日帝批判の提起なくして、わが国の労働者のなかに、日帝との闘争の確信を広範でかつ強固なものとして形成することはできないからである。

同時に今後の日帝との闘争は、日本本国内における闘争としてのみ展望してはならない。日本本国内においては、日帝との闘争に立ちあがらんとする労働者は、あまりに少数であり孤立しているかのように見える。しかし目を他国に転じれば、いく百万いく千万もの労働者人民が日帝を打倒すべき正面敵として掲げ、不可避に日帝との闘争に立ちあがっていくであろう。プロレタリアートの日帝に対する闘争は、この国内と国外における闘争を強く結合させて組織されねばならない。

第二に、わが国の労働者を国際的なプロレタリア階級へと形成していくための、直接的で実際的な国際主義連帯運動を創出することである。

リニア階級へと形成していくための、直接的で実際的な国際主義連帯運動を創出することである。

この提唱は、わが国の労働者が抑圧民族の一員であることをあいまいにするものでは決してない。わが国の労働者が、自国帝国主義打倒といふうみずからがまず担わねばならない任務を果たすためには、そして帝国主義的排外主義と最後までたたかいつゝためには、何よりもプロレタリアートの本性的な国际性に断固として立脚すべきことを提起しているのである。昨年以来のわれわれの新たな国際主義実践は、たゞえ国は違っていても、労働者は的確な指導さえあれば他国の労働者の苦惱と闘争に共感し、みずからたたかいの未来をそのなかに見ることさえできることを教えた。このなかに内包されているプロレタリアートの国际性こそ、帝国主義的排外主義とたたかうための何にもかえがたい武器である。

国際主義プロレタリアートの建設とは、大衆的な国際連帯闘争の組織化や大衆組織間の国境を超えた結合にとどまるものではない。それは他の国々のプロレタリアートとともに新たな世界党を創建し、世界赤軍を組織していくという現代過渡期世界をプロレタリア世界革命へと転化していくための最先端の任務へと、わが国プロレ

かつてベトナム戦争当時、われわれは米帝の軍事出動と日帝のこれへの支援に対し、全力でたたかうことを国際主義的実践として提起した。われわれは、この伝統を受け継ぎ日米安保や軍事基地の強化に対するたたかいを、そして何よりも日帝の侵略反革命戦争出動を阻止するための死力をふりしぶった決起を、すべての労働者人民に呼びかけるものである。しかし、膨大な帝国主義的排外主義が自然発生するこの新しい時代において、日帝の国内政策に対する阻止闘争をもって国際主義実践のすべてとするわけにはいかない。

この帝国主義的排外主義とたたかうする国際主義実践は、わが国の労働者を、民族国家の壁を越えて他国の労働者と同じ階級の兄弟とともに、プロレタリア階級へと、国際主義プロレタリアートへと実際に形成することを目的にしたものである。そのためにこそわれわれはすべての労働者に対して、他国の労働者の運命をみずから担うべきである。そのためには、われわれはすべての労働者として徹底してとらえるように提起する。

他国の労働者の要求と闘争を、みずからの要求と闘争として掲げ実際にたたかうことを持提起する。そして反帝民族解放・社会主義革命連帶! 日帝の侵略反革命戦争出動阻止! を今日の国際主義プロレタリア政治要求として掲げ、断固たる決起を開始するよう提起する。こうして、日帝への批判と闘争に立ちあがる他の国々の労働者に自己を同化させ、そうすることによって国境を越えた国際的階級へと形成されたプロレタリアートのみが、日帝が他の国々の労働者にむけさせようとする銃を日帝自身にむけることができる

のである。

タリアートを決起させていくこと今まで発展するものである。

第三に、国際主義プロレタリアートの建設にとって、在日外国人労働者の組織化に着手し、在日外国人労働者と我が國労働者の階級的団結を形成していくことが、日帝本国内では特別に重視されねばならない。

周知のことく、すでに一〇万人にのぼらんとするフィリピンやタイなどからきた外国人労働者が、「不法就労」という形で日本国内において働いている。いうまでもなく、その労働条件は日本人労働者とは比べものにならないほど劣悪なものである。帝国主義間抗争に勝利するため、今後日帝が低賃金外国人労働者の本格的導入にむかうことは不可避である。すでに政府内での検討が開始されており、遅くとも一年のうちに、は外国人労働者の単純肉体労働への就労が実質的には合法化されるであろう。こうして数十万から百万にものぼるであろう外国人労働者が導入されたとき、わが國労働者のなかに失業への恐怖から在日外国人労働者への排外主義的反発が生みだされることもまた不可避免である。全建総連が「在日外国人労働者の不法就労を取り締まれ」という決議を上げたことは、その先行するあらわれといえる。この在日外国人労働者との関係は、わが國労働者が他国の労働者の苦悩をみずからのこととできるのか否か、他国の労働者との階級的団結を形成し排外主義としたかいきれるのか否かを、鋭く問うものとなるであろう。

国際主義プロレタリアートの建設を真正面から掲げねばならないこの時代において、社会党はもはや論外としても、日共の排外主義への転落に対し容赦ない批判がなされねばならない。日共は、昨年一月の第一八回党大会基調において、国際帝国主義共通戦略を担おうとする日帝のあらゆる動向を米帝への従属の結果とらえ、日帝への正面戦ではなく「米帝への従属反対、日本の真の独立の実現」を主張するという根本的な誤りを深めている。そして、大会基調のすべてが日帝本国人民の経済要求・民主主義要求の擁護という立場からのみ提起されており、そこには国際階級闘争の利益からする日帝批判も、他国のプロレタリアートへの国際主義的連帯もいっさいが欠落しているのである。こうして、日共は帝国主義的排外主義への大敗北を準備している。日共が、「大韓航空機事件」をめぐって「北朝鮮の犯行」とふれまわり、保守化し排外主義にとらわれていく国民の上層に限りなくすりよっているのも、充分に根拠のあることなのである。

だが、この日共の誤りはあまりにも明らかであり、先進的労働者・学生にとってその批判はたやすいことである。われわれは新たな国際主義実践を開始していくにあたって、「血債の思想」を掲げる急進民主主義者の諸君への批判を

明らかにしておく必要があると考える。なぜなら、「血債の思想」はいまなお一部の労働者・学生に影響を与えていただけではなく、旧来の新左翼運動における国際主義実践の限界をもつときはつきとした形で示しているものだからである。

われわれはこれまで、「血債の思想」の背後に存在する反スターリン主義に対しても、容赦ない批判を浴びてきた。すなわち、現に世界に存在するすべての共産主義運動をスターリン主義だと否定し、その打倒を主張する彼らは、いかに国際主義をいおうとも、わが國の労働者人民を国际主義運動の再建と新たな世界党的創建へ結集させることができないことへの批判であつた。だがわれわれはここにとどまるわけにはいかない。国内階級闘争指導という側面においても、容赦ない批判を加えねばならない。

「血債の思想」を掲げる部分は、主觀的には

日帝の他国への侵略と抑圧を激しく告発せんとし、排外主義とたかわんとし、国際主義を実践せんとする。しかし、①彼らの日帝批判は、他の国々のプロレタリアートの日帝への告発をわがものとする国際プロレタリアートの立場からの日帝批判ではない。他国々のプロレタリアートの告発を、被抑圧民族からの抑圧民族への告発のみとらえ、これに立脚しようとする非プロレタリア的なものである。②彼らの排外主義との

## 共産主義を人民の希望として復権せよ

われわれは最後に、共産主義を人民の希望として復権するたかいを先進的労働者・学生が担うべき新たな前衛任務として提起する。

帝国主義本国においてロシア革命以降、今日ほど人民のなかで共産主義が希望として語られることがなくなつた時はなかつたとする。わが国においてもそうである。資本主義のもとでは決して絶えることのない労働者の憤激が生みだされつづけているにもかかわらず、それは

転落し、共産党の名において共産主義を辱めるばかりである。急進民主主義諸派は、労働者人民に資本主義への批判と共に資本主義を提起しなくなつて久しい。彼らは、労働者階級を資本主義の打倒にむけた闘争を最後までおこし進める階級として、共産主義世界を建設する階級として形成していくのではなく、反帝政策阻止闘争とのための團結に労働者階級の闘争をおおことどめなる役割を果たしている。右翼日和見主義諸派は、「赤と緑の結合」をとなえて、反近代主義はじめとしたさまざまな空想的社會主義に共産主義への希望と結びつけられていない。むしろブルジョアジーの新たな反共宣伝が人民のなかに深く浸透している。ブルジョアジーは、中ソ一国社会主義路線の破壊を利用して「資本主義の優位性」をことあるごとに宣伝し、少なくない人民をとらえることに成功してきた。それは、共産主義運動に労働者人民を組織していくうえで大きな壁となっているばかりでなく、帝国主義的排外主義の側に労働者人民を奪っていく大きな根拠となっている。



第三世界から共産主義の新しい息吹きが(ニカラグア 1月22日)

この事態に対して、共産主義運動の側から有効な反撃はまったくといっていいほど組織されていない。日共はすでに社会民主主義政党へと

闘争は、抑圧民族の一員であることの自己認識とその自己否定にとどまるものである。彼らは、帝国主義的排外主義との闘争をプロレタリアートの国際性に立脚して組織することを知らず、抑圧民族の一員であることを否定せんとする人間的正義にのみ立脚しようとする。③彼らの国際主義実践は、それゆえわが國の労働者階級を国際的なプロレタリア階級の一員へと形成し、他国々のプロレタリアートとの国境を越えた階級的團結を実際に形成することと切離されたものである。そして、日帝の国内政策に対する急進主義的阻止闘争が、彼らの国際主義実践のすべてになってしまっているのである。

彼らの日帝批判はまったく非プロレタリア的なものである。国際主義プロレタリアートの建設と決して結合することのない彼らの非プロレタリア的な国際主義実践は、わが國労働者階級を帝国主義的排外主義から根本的に分離させるような部分と根本的に分離し、かつてわが国新左翼運動が到達しえなかつた真にプロレタリア的な国際主義実践に踏みだし始めているのである。国際主義の新たな実践を、わが国と世界の階級闘争の未来のために担おうとする労働者・学生諸君に、心からの結集を呼びかけるものである。

共産主義はあらゆる空想的社會主義に対する  
組織されねばならない。共産主義を人民の生き  
生きとした希望へと復権するためのたたかいに  
立ちあがらねばならない。そのためにわれわれ  
は次のように提起する。

批判的実践である。希望としての共産主義はマルクスに始まつたものではない。人間が階級社会に分裂して以降、被支配階級の貧困と悲惨がそれに屈することを拒否する人間のエネルギーが自然発生させてきた希望である。マルクスはただこの希望に科学のメスを入れ、この希望が勝利するための物質的条件と、この希望を実現しうる主体と、この希望がたどるべき不可避の過程を明らかにしたのである。そしてだからこそマルクス主義は、プロレタリア階級の唯一の立脚理論たりえるのである。

人民のなかに広く存在する共産主義への絶望を突破するために、マルクス主義者こそが共産主義を人民の希望として復権するたたかいにとりかからねばならない。現実に生きる労働者・被抑圧人民の現実世界への批判を通して、共産主義を展望すべき新しい世界の希望として明らかにしなければならない。われわれが組織せんとする労働者は、資本主義のもとでは解決しようのない矛盾に日々ぶつかり、苦悩と憤激を生みだしている。「なぜ労働者がお互いに競争させられ、仕事がよくできないというだけで人間として価値がないもののように扱われるのか」「なぜ自分たちだけがいつまでも人のいやがる仕事をつかねなければならないのか。なぜそのことによって蔑視され差別されねばならないのか」「なぜ同じ時間働いても正社員とパートでは賃金が違うのか」。帝国主義本国労働者であるがゆえに経済的には豊かになつたとしても、このような苦悩と憤激は決して絶えることはない。

# 侵略反革命戦争

# 侵略反革命戦争出動阻止せよ

帝国主義本邦において、政治闘争がじみ出る。された経済闘争は、帝国主義の超過利潤に根柢をもつて経済主義を生みだす。とりわけ帝国主義間抗争が激化する今日、この経済主義は容易に帝国主義的排外主義と結びつく。政治闘争を断じて経済闘争から分離してはならない。自然発生する経済要求と経済闘争を、政治要求と政治闘争をもつて領導することがますます重要ななる。今日にあって自国帝国主義との政治闘争は他国のプロレタリアートとの國際連帯のための闘争と日帝への正面戦を結合してたたかうプロ

しタリアーノの政治活動として、新憲憲法をめぐらす問題は、新たな時代におけるプロレタリア政治要求として、反帝民族解放－社会主義革命連帯！日帝の侵略反革命戦争出動阻止！のスローガンを提起する。

このスローガンは、労働者人民のあらゆる抵抗の細流を、国際労働者連帯と日帝への正面戦に結合するための宣伝・煽動の基準である。そしてまた先進的労働者・学生がみずから先頭に立ち、労働者人民を組織するための運動戦の領導基準である。われわれはこれまで日帝の侵略反革命戦争準備とたたかおう！というスローガンを掲げてきた。だが急速に国際帝国主義として飛躍せんとする日帝は、いまやその国内反人

アルジミアジーの反共宣言に抗し、共産主義運動の側からの中ソに対する批判を明確にしなければならない。そしてそれは、共産主義世界を実現するために不可避に必要となる社会主義世界をたたかいとするための、現代過渡期世界プロレタリアートの実践的任務の確立と結合されねばならない。われわれは書齋の学者に対してもなく、日々現実の労働者人民の組織化に苦惱する先進的労働者・学生に対してこそ、共産主義を人民の希望として復権するこのたたかいへの断固たる結集を呼びかけるものである。

共産主義を人民の希望として復権していくためには、中ソ一国社会主義路線の破壊に対する批判を新たに確立し、労働者人民に提起していくことがぜひとも必要である。かつてソ連や中国は、人民のなかに共産主義への希望を日々生みだしていく存在であった。だがいまはまた違った。ソ連はペレストロイカを掲げ、中国は社会主義初級段階論を掲げ、生産の停滞と労働規律・労働意欲の低下を資本主義的手法の導入によって改善しようとしている。しかしそれは共産主義への希望を再生するものには決してならない。なぜなら労働者はそこに未来社会と解放されんとする人間の姿を見るのではなく、資本主義のもとで苦悩するみずからの人間の姿を見るだけだからである。

だがそのほとんどは共産主義者によって発見されることはすらなく、あきらめへと変わっていくか、漠然とした不満にとどまっている。共産主義者こそがこれを発見し、資本主義への原則的な批判へと發展させ、共産主義によってこそこれらの矛盾と苦惱が根本的に解決されることを提起しなければならない。こうして、現実に生きる労働者大衆自身を、資本主義打倒の主体、共産主義世界建設の主体へと形成しつづけねばならない。



## 大きな高揚を示す反原発運動(伊方町 2月12日)

を労働者人民に転化することが困難であつたがゆえに、売上税に反対したにすぎなかつたのである。導入されようとする大型間接税は、恒常的軍事財源の確保を狙うものである。それゆえこれとの闘争は、ほかの誰でもなく労働者階級がみずから課題として担わねばならないものである。先進的労働者・学生は、大増税への怒りから立ちあがる大衆を、恒常的軍事財源の確保、侵略反革命戦争出動とたたかう労働者階級の政治決起へと結合するためにたたかわなければならない。

強まる国家秘密法の国会再上程策動に反対する運動が、全国各地で再び高まりつつある。他方日帝の側も、東芝のココム違反事件、大韓航空機事件をめぐる韓国からの「日本における北のスパイを法的に取り締まれ」という要求、そして日米科学技術協定改定をめぐる米帝からの

略反革命戦争出動を阻止せよ！」と鮮明に提起している。ここにこの数年のプロレタリア政治闘争を領導する政治要求として、このスローガンを掲げるべき理由がある。

今春季、すでに労働者人民のさまざまな抵抗闘争が生みだされてきている。

今国会への上程が確定となつた税制改革法案は、大型間接税導入に対し、再び広範な反対運動が始まりつつある。だが昨年の売上税には激しく反対した流通業界のブルジョアジーや小ブルジョアジーの多くが、今回はすでに賛成に回っている。彼らはそもそも大型間接税の導入それ自身に反対していたのではない。彼らはただ他の大ブルジョアジーとは違つて新たな税負担

民政策のいつさいを明確に侵略反革命戦争出動を可能とすることにおいている。たゞえば米帝がフィリピンへの本格的軍事介入に踏みきると、日帝がベトナム戦争時とはまったく異なる共同作戦行動をとることは確実である。そしてフィリピンをはじめとした反帝民族解放・社会主義革命は、わが国の労働者人民に「日帝の侵

強まる国家秘密法の国会再上程策動に反対する運動が、全国各地で再び高まりつつある。他方日帝の側も、東芝のココム違反事件、大韓航空機事件をめぐる韓國からの「日本における北のスペイを法的に取り締まれ」という要求、そして日米科学技術協定改定をめぐる米帝からの

「最先端技術が共産圏に流れる」ことを防止するための「安全保障条項の新設要求」など、あらゆる機会をとらえて国家秘密法再上程の条件を整えようとしている。国家秘密法反対運動を、社共のごとく「スパイからの國の防衛」を承認したうえで、ただそのことが言論・表現の自由を侵害するから反対するという枠内へおしとどめではない。先進的労働者・学生は国家秘密法を有事立法の先取りととらえ、あらゆる反対運動を侵略反革命戦争出動にむけた階級闘争と排外主義育成攻撃との闘争へと発展させていかねばならない。

伊方原発出力調整実験反対運動の大きな高揚は、 Chernobyl 原発事故以降、反原発闘争が全国的に再び盛り上がりをきいていることを示した。現在の段階では Chernobyl のような原発事故が避けがたいものであること、そして原発が日々人間の生命と自然環境を破壊するものであることは、もはや隠しようもない事実である。水力・火力発電だけでも現在の電力需要をまかなえるにもかかわらず、日帝が出力調整や安全点検間隔の拡大をおこなつてまで原発の建設をおこなう理由は、日帝の核武装の準備にとって原発の維持と拡大が不可欠なことにある。命と環境を守らんとして立ちあがる労働者・人民を、日帝の核武装、侵略反革命戦争出動との闘争にまで決起させていくことは、先進的労働者・学生の重要な任務である。

さらに日米安保の強化とたたかい、沖縄や三宅島をはじめ全国各地でたたかわれる反基地闘争を発展させるためにたたかわねばならない。社会党・総評の反基地闘争が崩壊していくとともに、多くの反基地闘争は、基地被害から命と生活を守るために住民闘争としてたたかわれている。再び労働者階級をこの闘争の主体として登場させ、日米軍事同盟の強化と日帝の侵略反革命戦争出動に対する闘争へと、反基地闘争を発展させていくことはきわめて重要な課題である。

これらの大型間接税導入、国家秘密法再上程策動、原発建設、基地強化などの闘争は、現在の多くが市民運動や地域住民運動としてたたかれている。総評労働運動がほぼ崩壊をとげたにもかかわらず、それにかわる新たな階級闘争の陣形がいまだ建設されていないなかで、この状況は当分継続すると見なければならない。そしてこの現状を変革していくことは、わが国の政治闘争の発展のためにぜひとも必要なことである。われわれはそのために次のように提起する。

たとえ現在その多くが市民運動や住民運動としてたたかわれていたとしても、これらの攻撃はいずれも日帝の侵略反革命戦争出動にむけた重大な攻撃であるがゆえに、本来労働者階級自身がみずからのかの課題としてかかげねばなら



生活破壊・安保体制強化とたかう三宅島住民(87年7・15)

ないものである。そしてこれらの課題は市民運動や住民運動によってではなく、労働者階級こそがその中心を担わねばならないものなのである。

だがそのことは労働者階級の政治決起を、これらの市民運動や住民運動とその要求に溶解させていくといふということを意味しない。総評労働運動の崩壊過程において各地で生みだされた市民運動や住民運動は、日帝の全体的攻撃とたたかうのではなく、自分自身にいま現にふりかかる攻撃とのみたたかおうとする限界から自由ではない。これが温存されるならばきわめて危険である。先日、米軍基地騒音に反対する神奈川県大和市のある市民団体が三宅島を訪れ、「三宅島は広いので大和市の基地も三宅島で引き取ってくれ」と要求した。これはあまりにも突飛なエピソードであるかのようを見える。だが市民運動や住民運動が、自分の生活と命を守ることのみを目的とする限り、労働者人民の他の部分の要求と対立し、帝国主義的排外主義にすら組織されかねないことをこれ表示しているのである。だからこそ労働者階級は、

この限界ともっとも意識的にたたかわねばならない。自分にふりかかる攻撃とのみたたかうのではなく、日帝の侵略反革命戦争出動にむけた反人民政策の全体とたかわねばならないこと。自分の命と生活の防衛のみを目的にするのではなく、わが国労働者人民全体のそして国際的な階級闘争の利益のためにこそたたかわねばならないこと。労働者階級はこのことを提起し、日帝への正面戦と国際労働者連帯へこれら

の闘争を発展させていく任務をこそを担わねばならないのである。

このような新たな政治闘争の発展のためにこそ、大衆的プロレタリア政治統一戦線を建設していくことがすでにさし迫った課題となつてい

る。労働者人民のあらゆる抵抗闘争を日帝への正面戦と国際労働者連帯へと結合させ、労働者階級の大軍の政治決起を組織するための政治的統一戦線を何としても創出しなければならない。それは各地方ごとに建設されねばならないとともに、全国的な統一政治行動を可能とするための政治的統一戦線の全国協議会の形成を不可欠とするものである。全国各地のあらゆる抵抗闘争を、反帝民族解放・社会主义革命連帶! 日帝の侵略反革命戦争出動阻止! へと結合し、労働者階級の断固たる政治決起を組織し合うような政治的統一戦線こそを、われわれは建設していかなければならないからである。

われわれは、国際主義・プロレタリアートの建設にむけた新たな国際主義実践を、まずフィリピン革命への連帯に焦点づけて開始するよう呼びかける。フィリピン共産党は、対峙段階への突入を宣言し、フィリピンにおける反帝民族解放・社会主義革命は重大な段階を迎えている。新植民地主義支配を強める日帝が、米帝の本格的軍事介入とともになって米帝との大規模な共同作戦行動をとることは確実である。フィリピンにおける反帝民族解放・社会主義革命は、もはや破産を鮮明にした中ソ社会主義のなかに共産主義の希望を見ようとはせず、みずから革命を中心とした直接的援助を期待して展望しようとはせず、新たな実際的国際主義の要求を生みだしている。それは国際共産主義運動の再生と新たな世界党創建への希望を内包するものである。

われわれは、わが国労働者に対し、フィリピン労働者の日帝への告発をわがものとし、みずから日帝への批判と闘争を国際階級闘争の利益に立脚するものへと変革していくように呼びかける。「米帝の軍事介入とたたかい日帝の侵略反革命戦争出動を阻止せよ」というフィリピン労働者人民の提起に、全力をつくして応えるよう呼びかける。フィリピン労働者との階級的團結にむけて、在日フィリピン人労働者の組織化に立ちむかうよう呼びかける。国際共産主義運動再生への要請に応え、現代過渡期世界止揚にむけたたたかいにともに立ちあがるよう呼びかける。

最後にわれわれは、以上の新たな前衛任務を担うべき労働者・学生のもつとも先進的な諸君に対して、労働者政治委員会へ結集するように心から呼びかける。

武装せる革命の伝導路として建設されつけた労働者政治委員会は、プロレタリアートの政治決起を組織し、政治決起を領導する前衛としてその姿を鮮明におしだしていくであろう。同時に労働者政治委員会は、みずから反共イデオロギーに抗し、共産主義を人民の希望として復権するための宣伝者として登場していくであろう。われわれはこれを支持し發展させるために全力をつくす決意である。



右翼の台頭許すな

裁判所前の支援集会に襲い革命  
かかろうとする右翼反革命

昨日一〇月の沖縄国体において、日の丸を引きずり降ろし焼き捨てた知花昌一氏と、当日まったくのち上げで逮捕された知花盛康氏の初公判が、二月二六日、那覇地裁で開かれた。

知花氏の決起は、たんに日の丸強制への反抗としてあつたのみならず、天皇来沖策動を頂点として吹き荒れる沖縄「返還」政策の完成化攻撃に、身を挺して対決するものであった。それはまた、妥協と屈伏を重ねる「沖縄革新」を鋭く批判するものであつた。同時に一方では知花氏の決起は、右翼勢力の激しい憎しみの的の労働者人民の共感を得た。右翼が社共や「革新」がふるいにかけられ、知花氏の決起に背をむけるなかで、しかしその決起の正義性は多く知花氏決起直後、氏の経営する商店への放火や破壊をくり返したことに対し、戦闘的労働者人民は断固として徹夜での防衛体制に決起した。以降、一日も欠かさずたたかいづけられた防衛闘争によって、右翼は

の労働者人民の共感を得た。右翼が

昨日一〇月の沖縄国体において、日の丸を引きずり降ろし焼き捨てた知花昌一氏と、当日まったくのち上げで逮捕された知花盛康氏の初公判が、二月二六日、那覇地裁で開

## 沖縄 知花公判はじまる

連日のように街宣車でおしかけたが、知花氏の商店には指一本触れることはできなかつた。

公判が、二月二六日、那覇地裁で開かれた。

このようないいにかけて、初公判は開かれたのである。警察は公然と右翼および裁判所職員を指揮し、公判闘争を破壊しようとした。

この日、午前七時前から地裁前は労働者人民によって固められた。八時半、右翼が結集し始める。右翼は、街宣車のスピーカーのボリュームを

いっぱいにして「知花昌一は必ずとる（殺す）」と連呼し、お経のテープを流す。九時、知花両氏があらわされ、一〇〇名を越える支援者で前段三にわたって右翼一〇数名が姑息な

襲撃を試みるが、断固撃退する。右翼によって支援者をけ散らすとい

が、沖縄においてはほとんど前例のない、傍聴券の抽選をいいだす。地裁を支援者が追求する。当然の追求に地裁職員が動搖するのを、叱咤激励していたのは警察官であった。もちろんこんなこともかつてなかつたことであり、「三権分立」の原則もあつたものではなかつた。この追求

もくろみが失敗すると、今度は地裁の力をして傍聴席に右翼を送りこみ、法廷を威圧し、萎縮させんとしたのであるが、右翼は知花氏および支援者の熱気にのまれてしまい、野次の一つも飛はせず小さくなつていたの

# 右翼の襲撃を粉碎

1・26

のあいだ右翼は、抽選券を求めてお

しけ、警察官も支援するが断固阻止。結局、抽選券はすべて支援者の側に渡る。しかしあくまでも右翼を

傍聴席に送りこもうとする権力は、地裁職員を指揮し、急ぎよ抽選券を追加発行させ、別の場所で右翼に回したのである。

## 卒・入学式闘争へ

知花氏決起とその公判闘争を、三・四月の学校現場での卒・入学式闘争に継承し、これらをたんなる日の丸強制反対闘争としてではなく、日帝への総抵抗へと発展させていかねばならない。

知花氏決起とその公判闘争を、三・四月の学校現場での卒・入学式闘争に継承し、これらをたんなる日の丸強制反対闘争としてではなく、日帝への総抵抗へと発展させていかねばならない。



2・11 京都

## 紀元節反対に四百 那覇市職の宮里氏が講演

裁判所前の支援集会に襲い革命  
かかろうとする右翼反革命

一九六七年に紀元節が「建国記念の日」として復活されて、今年で二年。日の丸・君が代の公立学校への強制は日に日に激しさを増し、他の強制は日に日に激しさを増し、他

の強制は日に日に激しさを増し、他

集会は、部落解放同盟京都府連のあいさつで始まり、基調提案では「竹下自民党政府は、中曾根の戦後政治の総決算路線を引きつき、軍事費の一%枠撤廃、日米安保体制の再編強化とともに、日の丸・君が代・靖国を頂点とした天皇制攻撃を強化してきている。京都国体を利用し、日の丸・君が代を強制し、Xデーをもつてヒロヒトの戦争責任のいっさいを隠蔽し、昭和史のねつ造をおこなおうとしている。私たちは、アジア民衆のたたかいや沖縄民衆のたたかいに連帯し、天皇制攻撃に対するたたかいを盛りあげていこう」とのべられた。

集会は、部落解放同盟京都府連のあいさつで始まり、基調提案では「竹下自民党政府は、中曾根の戦後政治の総決算路線を引きつき、軍事費の一%枠撤廃、日米安保体制の再編強化とともに、日の丸・君が代・靖国を頂点とした天皇制攻撃を強化してきている。京都国体を利用し、日の丸・君が代を強制し、Xデーをもつてヒロヒトの戦争責任のいっさいを隠蔽し、昭和史のねつ造をおこなおうとしている。私たちは、アジア民衆のたたかいや沖縄民衆のたたかいに連帯し、天皇制攻撃に対するたたかいを盛りあげていこう」とのべられた。

つづいて講演に立った那覇市職労委員長の宮里千里氏は、昨年の沖縄

国体を通した日の丸・君が代をめぐる動きに触れ、教育労働者や自治体労働者の抵抗闘争、国体・ソフトボ

ール会場での日の丸を引きずり降ろした知花昌一さんのたたかい、また右翼による「世代を結ぶ平和の像」

破壊に対し、再建の運動が広範に巻き起こっていることを紹介した。こ

の後、日の丸・君が代強制反対八幡

市民連絡会議など三団体の決意表明がおこなわれ、集会決議、スローガンを探査し、京都市役所まで権力の妨害をはねのけて、戦闘的デモンス

トレーションが貫徹された。

2・21

# 竹下訪韓阻止に決起

韓国労働者階級の前衛党建設に連帯を！

京都

二月二日、「竹下訪韓阻止・韓

つぎにおこなわれた。

國民衆闘争連帶、全閑西緊急行動」

が、京都・円山公園ラジオ塔前でお

こなわれた。はじめに集会基調が提

起され、つづいて集会を呼びかけた

日韓連帯京都学生連絡会議、つぶせ

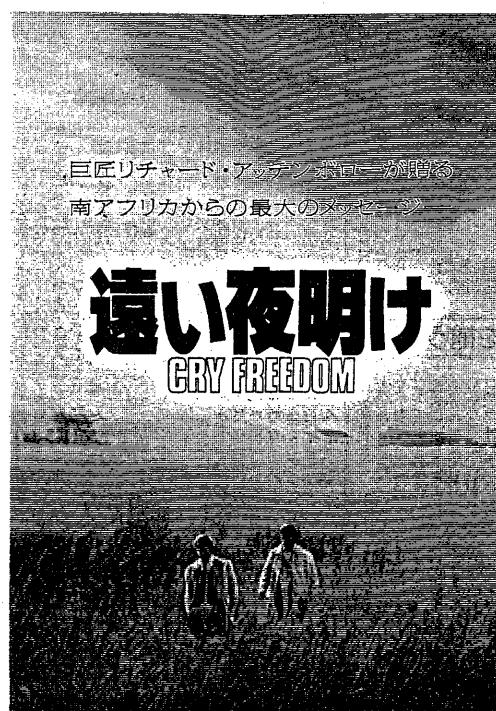
刑法・監獄法改悪！反弾庄大阪連絡

会議をはじめ参加団体の発言がつぎ

本でも今春上映されている。

## ●事実がもつ迫力

「ガングー」「コーラスライン」などで話題作を提供してきたリチャード・アーテンボロー監督が、「映画史に永遠に残る大傑作」と評価される映画を作った。「遠い夜明け」(CRY FREEDOM)が、日本でも今春上映されている。



▲宣伝広告より

## ●帝批判は不徹底

かくして、「遠い夜明け」は確かに「愛と友情の感動ドラマ、息もついたものではなく、「愛と友情の熱い感動」(宣伝パンフ)と評されるドラマ性をもちえたのは、シナリオが良かつたというよりも、新聞社編集長のウッズと、彼に対して大きな影響を与えた黒人運動家スタイル・ピコの生き様によっている。

映画は前半で黒人運動家ピコによる南ア政府のアパルトヘイト政策(人種隔離・黒人差別政策)に対する告発・糾弾と、白人である新聞編集長ウッズの共感過程を描く。南アの権力による黒人居住区域の破壊、黒

を描き、支配者に告発している。

映画の後半では、南ア権力によつて虐殺(拷問死)されたピコと同じ地点に立つたウッズが、アパルトヘイト政策の実態暴露と告発のために

家族(妻・子供三人)とともに、南アの権力による黒人居住区域の破壊、黒

人運動への数々の暴力的弾圧、さらには、警察署長自らの陣頭指揮による非合法的テロ・破壊活動等、南ア権力によるアパルトヘイト政策の実態

が描かれる。この脱出劇も、一二四時間の警察監視体制のもとで、しかもアパルトヘイトから逃れてきたために、韓国労働者人民のたたかいへの支援を強化しよう。とりわけ韓国大統領選をめぐつてますますはっきりしたように、韓国階級闘争の歴史的飛躍に連帯するわれわれの任務は、もはや民主化闘争への支援と連帯一般では決定的に不十分である。韓国プロレタリアートの政治的進歩と前衛党建設に意識的な支援と連帯を組織しよう」との訴えがなされた。

そして最後に、集会決議を拍手で確認したのち、京都市役所までのデモンストレーションと、市民に対するビラまきをやりぬき、この日の行動を終えた。

躍に連帯するわれわれの任務は、もはや民主化闘争への支援と連帯一般では決定的に不十分である。韓国プロレタリアートの政治的進歩と前衛党建設に意識的な支援と連帯を組織しよう」との訴えがなされた。



# アパルトヘイト政策

## を鋭く告発するが…

黒人差別をいまだに温存・支配しているアメリカ帝国主義や、朝鮮民族差別や部落差別を今日もなお、おこなっている日本帝国主義が、南ア政府のアパルトヘイト政策を「自由主義の見地」から非難しても笑止千萬ではある。が、それ以上に問題にせねばならないのは彼らの「自由主義」が、本質的には南アのアパルトヘイトと変わらぬ「階級支配」の隠れ蓑であるという点である。

暴力的形態(前近代的な形)をとする階級支配ではなく、平和的・民主的形態(近代的な形)をとる階級支配——これが日米帝国主義者の南ア非難の本質である。しかも、日帝の場合には、八七年度の南アとの貿易総額がアメリカを抜いてトップに立ったという自己の経済権益を背景にしていることも見逃してはならない。

帝国主義による階級支配(他民族支配・抑圧)のひとつの表れであり、これへの糾弾・告発が階級闘争のひとつ要素である黒人運動である。だから、「差別・抑圧のない自由主義の国」の日本人が、「自由と人間平等がない遠い国」の出来事として見ることを許してはいけないのである。

いずれにせよ「遠い夜明け」は、帝国主義が一切の人民支配を抵抗する階級闘争体に対して徹底的な暴力支配をもって臨んでくること、そして、この暴力支配へ民間人をイデオロギー的に組織すること(黒人差別)、さらに、これへの抵抗戦こそが人民解放の「夜明け」を約束することをわれわれに教えてくれている。

# 反対同盟切り崩し攻撃と対決し 軍事空港建設の野望を粉砕せよ

## 3・27 三里塚現地闘争に決起せよ

一月十四日におこなわれた芝山町議選において、反対同盟現職町議・石毛博道氏の当選がかかるところ。この勝利は日帝・公団、反動・裏行寺町政、さらには石井英祐を筆頭とする用水賛成派の重包囲をはねのけてたたかいとされたものである。八六年秋以来、日帝・空港公団は「九〇年概成」を掲げ、一期強行着工にうってでてきた。反対同盟と支援はこれに対し着実な反撃を組織し、団結を固めてきた。町議選の勝利はこのたたかいを引きつぐものである。この八八年緒戦の勝利を、一期決戦勝利へと前進させねばならない。

八八年こそ日帝・公団の「九〇年概成」を木端微塵にうち碎き、全労働者人民の力で一期決戦勝利の大道を切り開かなければならない。勝利の要是、三里塚闘争のプロレタリア政治闘争としての発展、反対同盟内部におけるプロレタリア的団結の強化、このことを通した三里塚闘争の社会主義革命の一翼への組織化である。

三・二七闘争を突破口に、三里塚一期決戦勝利へと進撃しよう。

## 二期工事は戦争準備の一環

三里塚二期工事強行は、日本帝国主義・ブルジョアジーの戦争準備の重要な一環である。

それは第一に、戦争準備にむけた巨大空港II

侵略反革命軍事空港建設をもくろむ攻撃である。

日帝ブルジョアジーにとって、日米安保体制のもとで、いつでも軍事空港に転化しうる巨大空港の建設は、決定的に重要な位置をもつてゐる。日米安保条約第六条に「緊急時の軍事使用のための平時からの準備」が明記されているように、通信、交通などの手段が軍事的に転用されることがすでに日米間で取り決められている。

本年一月十九日の日米防衛首脳会議では、有事の際の米軍の兵員や装備輸送のために日本の民間機・輸送船を調達することなどが公式の議題にあげられた。また、七五年の日米合同委員会で合意された航空交通管制に関する文書には、「米空軍が一時的に日本周辺空域を優先的に使える」とされている。しかもこの取り決めについて日本政府は、「米国側の了解がない限り公表はできない」と文書の公表を拒んでいるのである。また、八六年一二月に成田市長は市議会

で、「自衛隊の成田空港使用もありうる」と日本帝国主義の野望を代弁している。

巨大軍事空港建設の野望のもとで、空港機能の強化にむけた二期計画そのものの反革命的見直しもおこなわれている。八三年七月におこなわれたIATA（国際航空運送協会）調査団の空港公団に対する申し入れでは、「①現在の午前六時～午後一時という発着時間の制限をゆるめれば、二期工事をしなくとも空港の処理能力を高める」とができる。②もしどうしても横風用滑走路をつくるのなら、横風の時だけではなく普段から使えるようすべきだ。③増使用的のB滑走路は短かすぎて大型機の離発着に不適。

三四〇〇メートルに延長できないのならつくるべきではない」という空港機能の拡大強化の要求がなされている。これを受けて公団は、八六年一月には、B滑走路（二五〇〇メートル）の誘導路部分を拡大して滑走路と同じ幅に広げ、事実上二八〇〇メートルに延長すると発表している。また、「運用時間延長の検討機関の設置」（一月一四日、空港公団）といつた二四時



横堀団結小屋の鉄塔下で緊急集会(2月21日)

間軍事空港化の地ならしがすでにおこなわれて

いる。最終的には関西新空港と同様の四〇〇〇メートル滑走路一本の確保と、二十四時間使用がもくろまれている（羽田についても沖合拡張にともない二四時間空港にすることが検討されている）。戦争準備を画策する日帝にとって、巨大空港は絶対的に必要なものとなっているのだ。

第二に、二期工事強行は、労働者人民の戦争動員にむけた戦後政治の総決算攻撃の一環であ

る。

三里塚闘争は当初、農民の「土地を守れ」というたたかいから出発した。だが六〇年代末、「国際主義と組織された暴力」を掲げる革命的左翼と結合することによって、従来の農民運動の枠組みを大きく越える反戦反政府実力闘争へと前進してきた。そして七一年九・一六の三警官せん滅、七八年三・二六の管制塔占拠という、日本階級闘争史上の金字塔ともいべきだったか

いによって、「反政府実力闘争」からさらに「日本帝国主義打倒・社会主義革命」の問題に

逢着した。だがわれわれも含めた革命的左翼は、この歴史的地平を領導しえなかつた。それどころ



つてのようないわゆる「フェンスぎわでの警備から、反対同盟農家、団結小屋の存在する区域（空港から四～五キロの範囲）を四輪駆動の「ゲリラ対策車」で「四時間パトロールする」という、「面」への警備への飛躍的な強化がおこなわれている。検問、テロ、レンチの強化はいわゞもがなである。さらに空警隊一五〇〇人の維持費八〇億円以外に、空港警備のために年間一〇〇億円が計上され、ガードマンの増強も進められている。

## 社会主義革命運動の一翼へ

三里塚闘争は二年にもおよぶたかいのかで、決定的な局面を迎えている。反対同盟の団結を固め、全国労働者人民の総決起で三里塚闘争の勝利を実現しなければならない。われわれはそのため以下の三つのたたかいを組織する決意である。

その第一のたたかいは、三里塚闘争を日本帝國主義と正面対決するプロレタリア政治闘争として前進させることである。

三里塚闘争は、農民の「土地を守れ」というたたかいから出発した。だが二〇年にもわたり、全国労働者人民の一大闘争拠点として存在しつづけたのは、反対同盟農民の「農地死守・実力闘争」という戦闘性にのみあつたわけでは決してない。三里塚闘争は革命的左翼との結合を通して、六〇年代後半の「ベトナムに飛行機を飛ばすな」というスローガンに示される、「反戦反核の誓」「政府打倒の実力闘争」というたたかいで質を獲得してきた。ここに鮮明なように、日本帝国主義と正面対決する政治闘争としての性格を持つづけてきたことが、労働者人民の結集を可能にしてきた主要な根柢であった。

八三年三・八分裂後の困難な局面は、この政治闘争としての性格をあいまいにし、反対同盟のたたかいを地域的な農民運動へと固定化する傾向すら生みだした。右翼日和見主義者、市民主義者は、「空港よりも緑の大地を」のスローガンを声高に叫び、三里塚闘争の農民闘争への固定化を促進せんとした。われわれは「土地を守れ」というたたかいが、三里塚農民にとって、三里塚闘争を政治闘争として发展させていくうえでの水路としてあることを否定するものではない。また多くの労働者、市民、学生にとって「土地を守る」たたかいに対する素朴な連帯感が、三里塚闘争決起の契機となっていることも否定しない。なぜなら「農民の土地を守れ」という闘争はいくら戦闘的であっても、それが自体は農民階級の小生産手段防衛の経済闘争にすぎないからである。闘争の勝利を保障する唯一の道は、日帝の侵略反革命戦争出動と正面

また昨年九月には芝山町議会において、「過激派の排除とそのほう助者に対する警告」なる反動的決議が强行採決された。これは地元警察が町と保守系議員に働きかけておこなったものであり、まったく許しがたいものである。だがいかに警備体制を強化しようと、現空港を防衛しながら二期工事を強行できるものではない。

全国労働者人民の総力決起で、この弾圧体制をうち碎かなければならない。

対決するプロレタリア政治闘争として三里塚闘争を前進させることにある。

第二には、反対同盟内部にプロレタリア的指導部を建設し、反対同盟の階級的団結を強化することである。

反対同盟の団結は「農地死守・実力闘争」という戦闘的農民運動のそれである。しかしそれはいくら戦闘的ではあっても「小生産手段の防衛」という立場ゆえに、資本主義のもとでは普段に動搖せざるをえない立場である。たたかいが激化すればするほど、先鋭化すればするほど、先進的農民の当面する農業経営と生活は圧迫される。これに対し公团の懷柔策、条件派化策動は、見せかけのうえでは今まで以上に農業經營を保障する形でおこなわれる。日帝・公团は、成田用水攻撃に典型的なように、農民の「小生産手段の防衛・維持・改良」の意識にもとづく農業経営改良の要求を逆手にとって、闘争の分断や破壊攻撃をかけてくる。一期本格着工のなかで日帝は、成田用水攻撃と同質の、しかしそれとは比較にならないほど大規模な反対同盟分断・解体の攻撃をかけてくるだらう。

反対同盟農民をとりまく攻撃はこれにとどまらない。日帝による農産物輸入自由化、減反をはじめとした農業破壊、棄民化攻撃が激化している。極言するならば、農民の大多数を占める兼業農家や、專業であつても小規模農家は、土地をもつていても、農産品が売れず農業ができる状況がつくりだされようとしているのだ。わが反対同盟農民もまた全面的にこの攻撃にさらされている。

反対同盟のたたかいの立場は、二〇年以上の闘争でつちかたった「農地死守」を基礎にした反権力意識と「開拓魂・農民魂」である。この立場を体現し非妥協不屈にたたかいぬく反対同盟農民に対し、われわれはたたかう者としての共感と感動を覚える。だがこの立場にとどまるならば、二期強行着工のなかで激化する暴力的な土地取り上げ策動や、さまざま懐柔策動とのたたかいに勝利し、反対同盟の団結を十分に強めていくことはできない。

客觀情勢は反対同盟の団結を、「小生産手段

の戦闘的防衛」の枠組みにとどまらない団結へと前進させることを要求している。それは唯一、反対同盟内部に社会主義革命をめざすプロレタリア的指導部を建設し、反対同盟の階級的団結を強化していくことによって実現される。

第三には、右翼日和見主義者、急進民主主義者との原則的党派闘争を通して、三里塚闘争を社会主義革命の一翼へと組織しうくことである。

三里塚闘争は七一年九・一六闘争、七八年三・二六闘争をへるなかで、「日帝打倒・社会主

義革命」の問題にまで達着した。しかし新左翼諸党派は、この地平を革命的に領導することができず、三・八分裂を生みだし、この地平を大きく後退させた。だが日帝の死活をかけた二期強行着工とのたたかいは、再びこの問題を前面に浮上させるし、またこのことぬきにたたかの勝利はない。

右翼日和見主義者や市民主義者のごとく、三里塚闘争を土地強奪に対する農民の反対闘争、せいぜい軍事空港建設に対する政策変更要求へと歪曲しようとする部分は論外であり、われわれは彼らを断固として批判しなければならない。他方、急進民主主義者は、右翼日和見主義者や市民主義者は異なって、三里塚闘争の日帝打倒闘争との結合とその不可分離性を主張している。だが彼らの日帝打倒闘争は、プロレタリア独裁の樹立というプロレタリアートの階級目的と切離されたものでしかない。彼らは三里塚を戦闘的農民運動の枠にしばりつけ、三里塚闘争に結集する先進的労働者人民を、社会主義革命にむけて組織するという任務を放棄しているのである。

われわれは三里塚闘争の歴史的総括をかけて、プロレタリア社会主義革命にむけた労働者・農民の革命的共闘をつくりだす決意である。そしてこのたたかいを基礎に、プロレタリア革命にむけた階級闘争に、わが国の農民階級を結集させていく道を切り開く決意である。三・二七闘争に総決起し、二期決戦に勝利せよ。



鉄柵と有刺鉄線のむこう側で強行される二期工事